

園長だより

ゆっくりと進んだ台風、関東上陸が心配されましたが進路が変わり、大きな被害はなく一安心、備えあれば・・・と言うものの自然災害の恐ろしさを実感しています。

台風の通過の後、また暑い夏の再来です。この時期、多くの家庭が帰省、旅行、行楽地へと足を運び、楽しいひと時を過ごすことでしょう。子ども達の土産話を心待ちにしています。

夏の思い出 子どもの可能性を引き出す

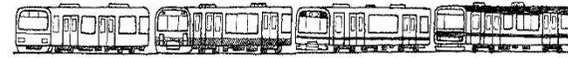
私の幼少期、夏の楽しみは田舎に行くこと、母方の実家に帰省することが夏休み最大の楽しみでした。田舎といっても栃木県(大田原市)です。今となっては「ちょっと そこまで」の距離ですが昭和まっ只中の時代は列車を乗り継ぎ4時間程かかりました。

昔は実に寛大な時代、田舎までの道中を子ども達だけで行くわけです。私の育った家庭は裕福ではなかったので両親は働きづめの毎日でした。

兄弟での帰省はわくわく、どきどき、当時私は小学1年生、一つ上の姉と、5歳上の姉が一緒です。とにかく上野駅に行くまでは姉から離れぬようについていきました。

上野駅につき宇都宮線黒磯行に乗るとホッとしたものです。

乗車前には母親からもらった小遣いで弁当、



お茶を買い、財布の中身に余裕があるときは冷凍ミカンを買って列車に乗り込みます。今の時代なら、さながら大冒険、危ない事はさせられない。子どもだけで行かせるなんてもってのほか、と思う方も多いでしょう。

当時は子どもだけで帰省することは当たり前前の時代、子どもの行動には寛容であった。

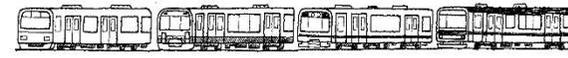
4時間程の車中は至福の時でした。

目的の駅に到着し更に実家までは数キロ歩かねばなりません。

ここで母親の親心を実感、子どもの足で数キロ、土産物まで持たされ、とうてい歩くことなどできない状態、途方に暮れている私に姉は「タ・ク・シ・ー・だ・よ」と言い記憶にある初めてのタクシー体験の始まりです。喜んで乗車し「上石上の〇〇さんの家まで」と姉のハキハキした声が車内に響き、運転手に伝えるといざ発車、その時ばかりは社長気分である。がしかし、車に乗ることに慣れていない、車中でどう振舞っていいものか困惑、でも天にもものぼる心地よさは忘れられません。

昭和の母は肝っ玉がすわっていた。子ども達を信じていろいろと体験させてくれた。

失敗するからやらせない、手間がかかるから面倒ではなく、とにかくやってみなさい。困ったときは助け合いなさい。可能性は秘めるものでなく試してみるもの、行動に起こしてみるもの、そんな心意気がありました。



あるのは自然だけ

田舎、とにかく、何もない、あるのは自然だけである。「何して遊ぼう、どうして過ごそう」到着した数時間はVIP待遇である。祖母や叔母からは「よく来た」「大きくなったな」と褒められ、「これ食べ、あれ食べ」ともてなされる。それもつかの間、その後は自然との対話の時間になる。

子ども達は遊びの天才である。自画自賛であるがなんでも取り込んでしまう。目に入るもの、興味が向いたもの、不思議だなと思うことすべてに反応し遊びに転嫁する。

畑や田んぼの作物さえ荒らさなければ何をやっても許される環境であった。

どんな遊びをしていたか

- ・田んぼへ続く用水路であそぶ
- ・小川でどじょうや小魚を捕まる。
- ・川であそぶ ・裏の雑木林探索
- ・納屋の探索 農業機械をひたすらいじる

※おじさんに怒られるはめに



- ・ほたる鑑賞 ・昆虫採集

※田んぼにはたくさん飛んでいました

- ・かんぴょう作りの手伝い
- ・農作物の収穫の手伝い

※手伝いも遊びの一種

- ・田んぼの野鳥ばらいの手伝い
 - ※火薬をつかい発火音(ドーン)で追い払う
 - ・夕立、落雷鑑賞
 - ※栃木県は雷が多い土地柄です。
 - ・井戸であそぶ 井戸水をくみ上げる
 - ・地域探索
- 田舎での遊びはあげればきりがありません。振り返ると危険なこともしていた時代です。

祖母も叔父夫婦もほったらかしではなかった。私の遊びに関心を寄せ、目をかけてくれた、物事の道理を間違えれば叱りもする。興味や関心を寄せる物や事象の知識や扱い等も教えてくれた。

祖母は「ばあさんの知恵袋」と言い、生活に役立つ知恵を教えてくれた。関わる大人が寛容に且つ繊細に付き合ってくれた事に感謝である。

自然のもつ神秘さや不思議だなと目をみはる感性を授けてもらった幼少期であった。

今、感性はさびついてしまっている。大人になればなるほどに感じない心になっていないかと自省の念にかられています。

本来、遊びは受動的でなく自ら感じ、動き、働きかけるもの、時には受け身のものもあるがいたって能動的であってほしい。

身近な環境での子ども達の感じる不思議、発見に付き合える大人でありたいものです。幼少期の感性、再びである。

(園長 廣部信隆 22)